



共生の時代

'08
1
月

●発行:グリーンコープ共同体理事会 ●編集:共生の時代・編集部 ●〒812-8561 福岡市博多区博多駅中央街8番36号博多ビル7階 TEL092(481)7923 FAX092(481)7876



グリーンコープ共同体専務理事

東原 晃一郎 さん

1960年北九州市に生まれる。1983年旧グリーンコープ生協ちくこの前身の一つである共生クラブ生協に入職、無名舎の活動にもかかわった。グリーンコープ生協が設立、グリーンコープちくこの専務理事に就任。2005年旧グリーンコープ生協福岡・北九州が合流後、グリーンコープ生協ちくこの専務理事に。2007年9月12日グリーンコープ共同体設立に伴い、共同体専務理事を兼任

プロフィール

1960年北九州市に生まれる。1983年旧グリーンコープ生協ちくこの前身の一つである共生クラブ生協に入職、無名舎の活動にもかかわった。グリーンコープ生協が設立、グリーンコープちくこの専務理事に就任。2005年旧グリーンコープ生協福岡・北九州が合流後、グリーンコープ生協ちくこの専務理事に。2007年9月12日グリーンコープ共同体設立に伴い、共同体専務理事を兼任

わが子が一番大事だという気持ちがあるからこそ人間は協同できます

10

年後も今と同じグリーンコープであり続けるために満を持してグリーンコープ共同体は昨秋発

達した。

遭れば1970年代、食品公害が蔓延する中、地域の女性たちの食への運動からはじまった生協は、1988年にはグリーンコープとして産声をあげ、今や毎日の暮らしに根ざした環境や福祉などの領域にまで広がっている。豊かに開花したグリーンコープを10年後も保ち、さらに深めていくためには、今と同じことを漫然とやっていてはおぼつかない。創成期を担った団塊世代が退く今、そのような危機感がグリーンコープ共同体発足の強い動機となった。

共同体専務に就任した東原さんは言う。「グリーンコープの先達は、敷を切り開くように格闘して現在を創ってこられた。私たちは言わばその整地されたフィールドでぬくぬく過ごすこ

とを許されていたと思います。しかしこのままではいけない。真摯に自らを振り返るというところからはじめています」と。とは言え、共同体という姿は見えにくい。「根本は今ままで変わらねえ。人がグリーンコープに加入する時、そこにあるのは『這えば立て、立てば歩め』という親心です。わが子に安全なものを食べさせたいという気持ちは、どんなに時代が変わろうと不変です。『食べものは子育ての感覚と手続きで』、グリーンコープの原動力は昔も今もこれから、その心です。一つひとつ言葉を選みながら噛みしめるように話す。

「しかし、少子高齢化という時代の趨勢。これから経済が縮小していくという事態は避けられませんが、地球の悲鳴も聞こえます。これまで14の単協と連合に分断されていた力を、共同体の構造という点では、それぞれの主体を貫き共同体という主体をもう一つ立て、すべての力を一つに結集させるということですね。その二つが二つに一つになる、ということですね。」

2008年
未来を見つめる
グリーンコープ



Contents

2007年度 グリーンコープ生乳生産者交流会 生産者へ 心をこめて “ありがとう!!”	2
うちのメーカー・うちの生産者 ⑧ 金子産業株式会社 弁当用秋鮭	3
私たちの食べる権利を守る 遺伝子組み換え作物栽培の拡大阻止をめざして	4・5
暮らしの中の化学物質を考える PRTR制度ってなあに?	6
グリーンコープやまぐち生協発 脱原発学習会 豊かな自然、食べもの、そして生命を守るために	7

あけましておめでとございませう。

新しい年を迎えるということは、何だかワクワクするものです。わが家の3人の子どもたちにとっても新しい時代を迎える年になります。

長女は結婚、長男は進学、次女は社会人へ……。どうか3人にもいい出会いがありますように、と願わずにはいられません。

とりわけ「結婚」という

送

信

出会は、その周囲の人たちにも新しい出会いをくれるのだと感じています。素敵なことだとは思いませんか?

思えば、私自身、グリーンコープにかかわることたくさんうれしい出会いをいただいています。

感謝!

みなさんにも、今年、いい出会いがありますように。

グリーンコープ生協ちくこの専務理事
吉川るみ子

生産者へ心をこめて “ありがとう!!”



会員生協のびん牛乳アピールから



くもと
びん牛乳への思いを「世界にひとつだけの花」の替え歌で熱唱



やまぐち
かわいいペーパーサートでびん牛乳のよさをアピール



さが
配役と小道具に工夫が凝らされた寸劇



南九州
エクササイズでびん牛乳の利用をアピール



おおいた
おおいた設立20周年を記念してつくられたびん牛乳の替え歌を熱唱



タオルとせっけんの目録が生産者へ贈呈された

グリーンコープからは共同産直・交流委員をはじめ組合員102人、生産者30人、熊本県酪農連から3人、菊池地域農協から9人、日本ミルクコミュニティから2人、全部で146人がパシオンに集いました。冒頭、グリーンコープ共同産直・交流委員長の本河しのぶさんが、「びん牛乳が誕生して今年で4年目、いつも良質な生乳を生産していただきありがとうございます。今年も生産者のみなさんとの交流会を開催することができました。びん牛乳はグリーンコープの自慢の商品ですが、このところ利用が伸び悩んでいます。今日の交流で気持ちを伝えあい、びん牛乳のよさを多くの人に伝えていきましよう」と挨拶をしました。菊池地域農協同組合酪農部会の青木部会長から「消費

者」と生産者の大きな輪をつくるとても素晴らしい交流会で、他にはない取り組みだと思っています。今、世界的に問題となっているバイオ燃料の影響で飼料であるトウモロコシの価格が高騰する中、生産者は日々努力や工夫をしています。今後もさらなるサポートをと思っています」と挨拶がありました。

生産者紹介のあと、グリーンコープから「タオルとせっけんの目録」と各会員生協の組合員から寄せられたメッセージが贈呈されました。続いて各会員生協から生産者への感謝を込めたアピールが披露されました。それぞれ工夫が凝らされたパフォーマンスに、会場が笑いの渦に包まれる場面もありました。こうしたアピールは毎年交流会の恒例となっており、組合員と生産者の絆を深める上で欠かせないものとなっています。今回初めて生産者から、日々の酪農場のようすが映像で紹介されました。「生乳のできる過程を見てもら

えるようにとつくってみました。飼料の高騰や糞尿処理法の改良など、酪農を続けていくためには思いがけない支出もあり楽観できない状況ではありません。組合員のみさんの思いをしっかりと受け止め、新たな生産への励みにします。今後さらなる顔の見える関係を一層強めていきたいと思っています」と、生産者代表の矢野さんが熱く語りました。

「よい牛乳には良質の生乳が欠かせません。大切に生産される生乳を私どもの工場で扱わせていただけたことにいつも感謝しています。びん牛乳スタートの時から工場長は3代目になりましたが、気持ちは変わらなず、さらによいものをつくっていきこうという思いを強くしています。是非工場へ何度

でも見学にきてください。世間一般の牛乳離れと同様、びん牛乳の利用も落ちていきます。これからも一緒にびん牛乳を守り育てていきましよう」と日本ミルクコミュニティ(株)九州事業部生産課の大野課長からメッセージが伝えられました。

その後組合員と生産者がグループに分かれて昼食を囲みました。ミルクコミュニティが提供した冷たいびん牛乳、生乳生産者女性部が手作りのデザートを食べながらのにぎやかな昼食交流会となりました。食の安全や後継者問題などのシビアな話題から、びん牛乳への思いや生産者が語る将来の夢など、話の輪がどんどん広がりました。デザートは牛乳かんといううは「せひレシビを知りたい」という組合員の声で、急遽レシビのコピーが回るといふ場面もあり、会場は終始和やかな雰囲気になっていました。

グリーンコープからは共同産直・交流委員をはじめ組合員102人、生産者30人、熊本県酪農連から3人、菊池地域農協から9人、日本ミルクコミュニティから2人、全部で146人がパシオンに集いました。冒頭、グリーンコープ共同産直・交流委員長の本河しのぶさんが、「びん牛乳が誕生して今年で4年目、いつも良質な生乳を生産していただきありがとうございます。今年も生産者のみなさんとの交流会を開催することができました。びん牛乳はグリーンコープの自慢の商品ですが、このところ利用が伸び悩んでいます。今日の交流で気持ちを伝えあい、びん牛乳のよさを多くの人に伝えていきましよう」と挨拶をしました。菊池地域農協同組合酪農部会の青木部会長から「消費

でも見学にきてください。世間一般の牛乳離れと同様、びん牛乳の利用も落ちていきます。これからも一緒にびん牛乳を守り育てていきましよう」と日本ミルクコミュニティ(株)九州事業部生産課の大野課長からメッセージが伝えられました。



ていねいに手作りされたメッセージ集には生産者への感謝の気持ちが綴られている

でも見学にきてください。世間一般の牛乳離れと同様、びん牛乳の利用も落ちていきます。これからも一緒にびん牛乳を守り育てていきましよう」と日本ミルクコミュニティ(株)九州事業部生産課の大野課長からメッセージが伝えられました。

その後組合員と生産者がグループに分かれて昼食を囲みました。ミルクコミュニティが提供した冷たいびん牛乳、生乳生産者女性部が手作りのデザートを食べながらのにぎやかな昼食交流会となりました。食の安全や後継者問題などのシビアな話題から、びん牛乳への思いや生産者が語る将来の夢など、話の輪がどんどん広がりました。デザートは牛乳かんといううは「せひレシビを知りたい」という組合員の声で、急遽レシビのコピーが回るといふ場面もあり、会場は終始和やかな雰囲気になっていました。

グリーンコープ生乳生産者交流会は今回も、生産者、びん牛乳製造メーカー、組合員という三者が一堂に会し、改めてそれぞれの役割を確認し、思いを確かめあう場となりました。

でも見学にきてください。世間一般の牛乳離れと同様、びん牛乳の利用も落ちていきます。これからも一緒にびん牛乳を守り育てていきましよう」と日本ミルクコミュニティ(株)九州事業部生産課の大野課長からメッセージが伝えられました。

その後組合員と生産者がグループに分かれて昼食を囲みました。ミルクコミュニティが提供した冷たいびん牛乳、生乳生産者女性部が手作りのデザートを食べながらのにぎやかな昼食交流会となりました。食の安全や後継者問題などのシビアな話題から、びん牛乳への思いや生産者が語る将来の夢など、話の輪がどんどん広がりました。デザートは牛乳かんといううは「せひレシビを知りたい」という組合員の声で、急遽レシビのコピーが回るといふ場面もあり、会場は終始和やかな雰囲気になっていました。

●みなさんから贈られたタオルをいつもありがたく使わせていただいています。みなさんのアピールはとても楽しくて、明日からまた頑張ろうと思えました。

●毎年贈られるタオルに込められたみなさんの想いを胸に刻み明日からも生産に励みます。びん牛乳の利用が減少傾向にあり、飼料価格も高くなっていますが、これからも酪農に対する理解をすすめる工夫をしていきたいと思っています。

●生産者の感想から
毎年贈られるタオルに込められたみなさんの想いを胸に刻み明日からも生産に励みます。びん牛乳の利用が減少傾向にあり、飼料価格も高くなっていますが、これからも酪農に対する理解をすすめる工夫をしていきたいと思っています。

●組合員の感想から
関西に引越した当時、グリーンコープはまだなく、びん牛乳が飲めなくなりましたが、とても残念でした。今またびん牛乳を飲む喜びを感じています。子どもたちと一緒にずっと飲み続けていきます。

●大変な状況の中、ユーモアを交えながら、生産の現場を語る女性生産者のしなやかな姿勢にパワーを感じました。グリーンコープと生産者の顔の見える関係の中から生まれたびん牛乳を伝えることが私たちの役目だと思いました。



金子産業の全景

海からの贈り物

弁当用秋鮭



うちのメーカー

81

佐賀県唐津市

金子産業(株) 唐津事業本部

うちの生産者

日本有数の漁場で知られる玄界灘に面した佐賀県唐津市に金子産業(株)はある。漁獲から、食品加工までを一貫して行う総合水産食品加工メーカーだ。魚の品質のよさを追求する姿勢に迫った。併せて秋鮭漁最盛期(10月初旬)に訪ねた北海道道東沖の水揚げのようすを紹介する。

㊦ 弁当用秋鮭のできるまで



標津港



標津港の水揚げのようす



雄雌、色、大きさなど、手早く選別され早朝のせりかけられる



ひと抱えもある秋鮭。このサイズでも今年はお小ぶりの傾向だ



専用の機械で手早くアタマと尾を取る



三枚におろされた切身は手作業で腹骨を除かれた後、瞬間凍結され金子産業へ



弁当箱にちょうどよいサイズにカットし、塩水に漬ける



食品第二営業グループ 栗原 孝利さん

海に開かれた日本では古くから良質なタンパク源として魚を食べてきた。鮮度のよさを保つために、その地域ならではの加工方法で加工・保存してきた。現在では加工及び冷凍技術、輸送の進歩によって遠隔地で獲れた魚が手軽に食卓に上るようになった。しかし一方で、地球温暖化による海洋の生態系への影響や、魚離れとも言われるような嗜好の変化など、漁業をとりまく状況は年々厳しい側面がある。

時代と共に躍進する漁業



金子産業の創業は1905年(明治38年)、鰯漁を中心とした海産物問屋がその起りだ。その後昭和に入ってから急速な近代化と高度経済成長に伴ない魚の

需要と流通が大幅に拡大していった。風力に頼っていた手漕ぎ木造船による漁法もエンジン搭載した大型船に変わり、効率的に多量に漁獲できる旋網漁法へと変化していった。

以降、金子産業は総合的な水産加工流通企業へと成長した。関連会社が所有する旋網船団が対馬沖や五島沖を中心に、遠くは東シナ海で操業している。春は鰯、夏には鰯、冬は寒鰯などの四季折々の新鮮な魚を年間をとおして届けている。

「組合員のみならずから思いがけないヒントが得られる商品交流会は貴重な機会です」と言う営業担当の栗原さん。あじフライや、素材のよさを生かしたさば南

8月末の解禁日から1月にかけて釧路や標津沖で見られる秋鮭漁は北海道東沖の風物詩だ。海を回遊して繁殖のために栄養分を蓄え、約4年かけて生まれた川へ戻ってくる習性を生かした鮭漁は昔から行われてきた。今日では安定した漁獲量確保の目的で標津川や十勝川の上流で稚魚放流事業が行われている。海の変化から、年々漁獲量は若干減少しており、3.5kg級の大型の鮭が揚がることは稀になってきている。

「組合員のみならずから思いがけないヒントが得られる商品交流会は貴重な機会です」と言う営業担当の栗原さん。あじフライや、素材のよさを生かしたさば南

「おいしい魚を一人でも多くの人に食べてもらいたい」という創業以来からの精神はこれからも貫かれていくに違いない。

北の海のおいしさを届ける

からだ。漁場やその漁期によって肉質、色などが変わってくるため、買い付けは目利きの地元専門業者の経験が物を言う。手早く三枚におろし、瞬間凍結された秋鮭は鮮度のよい肉質が保たれている。金子産業では秋鮭のフィレを食べやすいサイズにカットし、㊦海水塩(なまぎ)の塩水に漬けて製品化する。

恵まれた環境に近いこともメリットになっている。現在各地で漁獲された貴重な魚介類の中で、国内の流通ルートに乗らない小さい規格のものが特に安価で取引され、中国をはじめアジア諸国へと輸出されている。金子産業では旋網にかかった小型の魚を使った加工品も積極的に開発している。

漁業が同じ第一次産業の農業と違うのは、人間が操作不可能な広大な海洋という自然生態系のサイクルの中で育まれているという点だ。「毎年、同じ量・規格の魚が獲れるとは限りません。計画的に栽培すれば通年収穫も可能な農業とはまた違った難しさがあります」と言うのは企画・開発を手がけてきた猪股さんだ。

創業から100年余り、金子産業は魚を限られた水産資源と捉え、育てる漁業に着目してきた。外洋性の

「おいしい魚を一人でも多くの人に食べてもらいたい」という創業以来からの精神はこれからも貫かれていくに違いない。

※1 旋網漁法とは



機動性のある漁船で鰯・鰯などの魚群を取り巻いて魚網を敏速に張って漁獲する

※2 グリーンコープのメーカーの集まりであるグリーンクラブと会員生協の組合員の交流会

大阻止をめざして 命を守る …

禁止を 要請!

、NSW州とV
05州で現在、ナ
ム(一時停止)

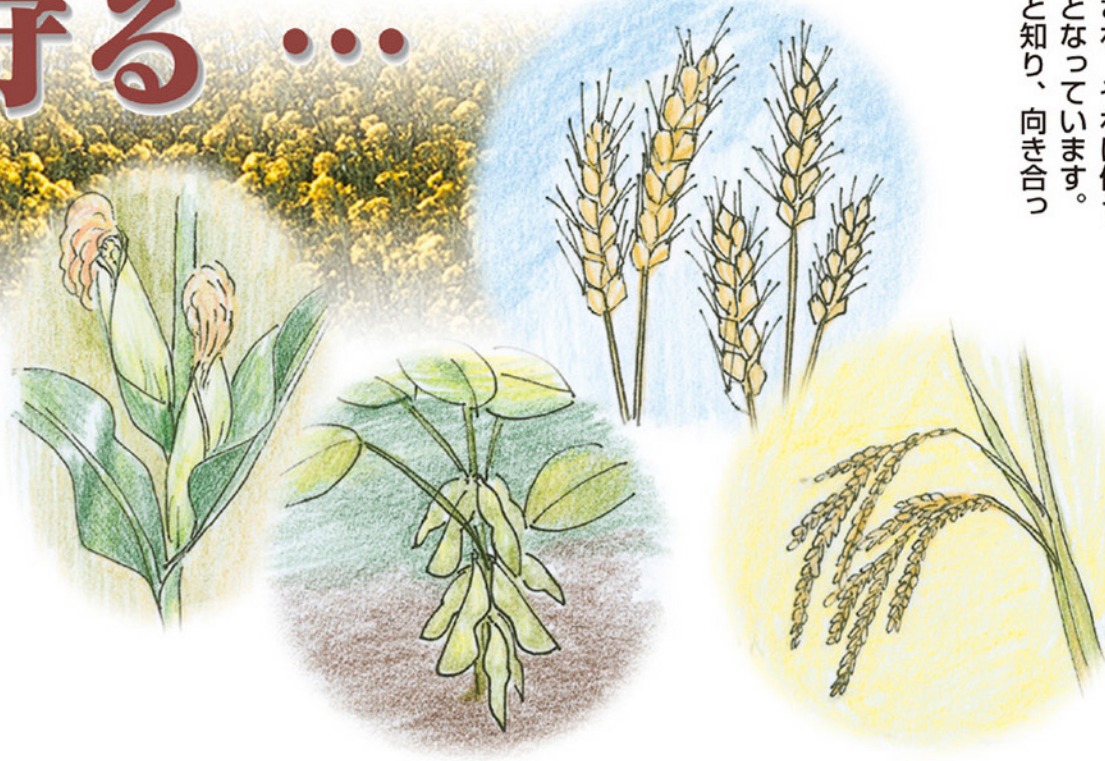
5の非GMナタネ
でも日本にある
の送付などさま
いよいよモラト
輸入している4つ
O連絡協議会」

の管轄は外交や
れている。従っ
物の栽培や輸出
モラトリアム政
による汚染が拡
出ができなくな
記は一変。2006
GMナタネの栽

本の消費者団体
物の栽培を規制
の直談判だ。
て署名を提出し
き、日本からの
(VIC州)では州
方向性がほぼ確
では影の内閣を
員会議長とも話
省のキム・チャ
禁止を打ち出し
してくれた。

ナダから大量の
こだわってはい
290万人の日本
ていた。また、G
が実用化されて
、GMナタネが
どの州でも終始
の露出も多く、
を投じることは

ム解除に反対す
本の消費者も参
問、オーストラ
演会、それに続



今から10年前、日本に遺伝子組み換え(GM)作物が輸入されるといふ事態を受けて、「遺伝子組み換え食品いらない!キャンペーン」を中心に私たちのGM反対運動がはじまりました。それは食べものの基本に対する危機感が根底にあったからです。

日本におけるGMコメやGM大豆などの商業化のための開発・研究に対する反対運動は大きな成果を残しました。また、3年間のGMナタネ自生調査活動によって、輸入GMナタネによる自然環境への汚染が深刻化していることが明らかになりました。バイオテクノロジーの研究はとどまることはありません。今やエネルギーの原料としてGM作物が取りざたされ、それに伴う食糧危機が世界的な問題となっています。このような状況をきちんと知り、向き合っていく必要があります。

私たちが買ってきたGM反対運動

「遺伝子」とは、人間をはじめ生命あるものを支配している根源的なものです。神の領域であると考えられていた遺伝子。植物や動物の遺伝子を人間の手で操作して別の遺伝子と結合させ、従来なかった形質をもつ生物を作り出すというのが遺伝子組み換え技術です。モンサントなどの多国籍企業がその技術を使って作っている作物や食品の商業化や種子支配が大きな問題となっています。グリーンコープは、生きとし生けるものの「生命」を守ることを根幹に据えていること

GMナタネ自生調査によって 明らかにになった環境汚染

世界的なバイオテクノロジーの研究がすすむ中、GM問題は待たなしたに私たちを襲ってきます。植物はもちろんGM動物の問題も明らかになりました。中でも、深刻な問題として浮上してきたのが、輸入GMナタネが日本国内で自生しているということです。

日本はカナダから大量(約8割)のGMナタネを輸入しています。その輸入港近辺やトラックの輸送幹線道路にGMナタネがこぼれ落ち繁殖しているという実態が、2005年からはじまった全国的な自生調査活動によって明らかになり、しかも汚染が広がってきていることが分かりました。本来、菜の花は一年草であるにもかかわらず、GMナタネは生命力が強いので、越年し巨木化しているものも見られます。在来のナタネや同じアブラナ科のカラシナやキャベツなど食用作物

から、遺伝子を操作するという技術に真向から異議を唱えてきました。

1998年、7品目のGM作物が輸入されるといふ政府承認を受けて、私たちの「食べない!」「買わない!」「作らせない!」という運動が「遺伝子組み換え食品いらない!キャンペーン」を中心にスタートしました。そのはじまりは、まずは「遺伝子組み換え問題とは何か」を知ることからでした。知れば知る程、GM問題の深刻さが浮き彫りになってきました。GM作物の輸入に加えてさまざまな作物が国内で開発・商業化されるようになってきたのです。そのような事態に対して、全国の仲間と共に運動を展開してきました。

非GMナタネが入手できなくなる?!

物がGMナタネに汚染される可能性があります。このような状況を何とか防ぎたいとの思いからはじまった調査活動。そこから見えてきた課題は、日本全体をGMフリー(GM作物のない)ゾーンにしていくということです。ヨーロッパなどではGMフリーゾーン宣言をしている国や自治体が多くあります。GM作物の栽培禁止をはじめ、こぼれ落ちによる環境汚染のない地域を増やしていくGMフリーゾーン運動の取り組みが今後大きな意味を持つこととなります。

グリーンコープの「めー一番搾りなたね油」の原料はオーストラリア産の非GMナタネです。最初はカナダ産でしたが、カナダでGMナタネの栽培割合が増えたことから、非GMナタネとGMナタネの分別が難しくなりました。そのため、1999年から非GMナタネのみを栽培しているオーストラリアからの輸入に切り替えました。カナダでは非GMナタネの栽培はされていてもGMナタネに汚染されてしまい、純粋な非GMナタネは皆無だと言われています。

現在オーストラリアでGMナタネを栽培しようという動きが起こっています。GM作物の商業栽培はクイーンズランド州のGM綿のみというオーストラリアでのGMナタネの栽培は私たちにとって大変な問題を引きつけています。世界的なバイオ燃料ブームによるGM作物栽培面積の拡大という問題と、GM作物を食べたくないという権利が守れなくなるという危機的状況が横たわっているのです。これらと対峙していくためには、GMフリーゾーン運動を国際的なつながりの中で拡大していくこと、消費者の権利としてEU並みのGM食品表示を実現させること、オーストラリアのGMナタネ栽培禁止をオーストラリア国民と共に訴えていくことなど、運動を強力にすすめていく必要があります。

オーストラリア各州のGMナタネ栽培規制法の解禁の動き

州名	規制法	モラトリアム法の見直し
クイーンズランド州 (QLD)	規制法なし。GM綿栽培	
ニューサウスウェールズ州 (NSW)	「遺伝子技術法2003」で規制。綿は規制の対象外	2008年3月3日期限切れ
ヴィクトリア州 (VIC)	「GM作物管理法」2004年3月、ナタネのみ規制	2008年2月29日期限切れ
首都特別地域	「遺伝子技術法2004」あらゆるGM作物の商業栽培を禁止	
ノーザンテリトリー (NT)	規制法なし。2002年にGM綿の栽培禁止	
南オーストラリア州 (SA)	「GM作物管理法2004」あらゆるGM作物の商業栽培を禁止	2008年4月29日期限切れ
タスマニア州 (TAS)	「GM作物管理法2004」あらゆるGM作物の商業栽培を禁止	2009年11月16日期限切れ
西オーストラリア州 (WA)	「GM作物フリー地域法2003」あらゆるGM作物の商業栽培を禁止	2008年12月期限切れ



遺伝子組み換え作物栽培の拡大 … 私たちの食べる権利



講師 ジュディ・カーマンさん

プロフィール

1957年オーストラリア・アデレード生まれ。理学博士。代謝調節・栄養化学・がんの分野で博士号を取得。専門は公衆衛生学。国や州の機関でがん、エイズの研究に従事する傍ら、農村地域を中心に積極的な講演活動を行い、遺伝子組み換えの危険性について警鐘を鳴らす

オーストラリアからジュディ・カーマンさんを招き、緊急講演会が開催され、組合員108人が参加しました。(グリーンコープ共同体・グリーンコープ生協ふくおか共催)

11月21日
福岡市

GMナタネ栽培の勢 オーストラリアに

オーストラリアでナタネが栽培されているのはVIC州、SA州、WA州、TAS州の5州。そのナタネをはじめとするGM作物栽培に関するモラトリアムの見直しが進められている。

オーストラリアがGM作物栽培に向かうと私たちの入手が難しくなるという危機感から、これまでオーストラリア大使館への要請や各州への団体署名などに取り組んできた。しかし、事態は変わらず、ナタネの期限が迫ってきたため、非GMナタネを輸入する州へ直接要請行動をするために「ストップ！GM」から3人が訪豪した。

オーストラリアは州政府の権限が強く、連邦政府の防衛、通貨など国全体にかかわることのみとさせて、国としてはGM推進の立場をとっているが、作などの具体的な政策は州政府に権限がある。各州が策をとったのは、カナダでGMナタネの種子や花粉が流入したことで非GMナタネを求めるEU諸国への輸送、大きな市場を失ったことにある。しかし、状況は年々悪化し、バイオ燃料ブームが追い風となってナタネの栽培が拡大している。

今回の訪豪の目的は、グリーンコープを含む日本155団体(290万人)から寄せられた「GM作物のモラトリアムの継続を求めるお願い」を持してシドニー(NSW州)では緑の党の議員をおし、第一産業大臣のアドバイザーと会談でメッセージを伝えることができた。メルボルン(VIC州)では政府の高官と会談、署名提出までできたが、政策の決定は遅い。アデレード(SA州)では野党議員らとの会談やモラトリアム検討委員会をすることができた。パース(WA州)では農業・食料大臣が歓迎してくれた。大臣はGMナタネ栽培でおり日本の消費者の願いに応えたいとの意向を示した。オーストラリアでは「日本の消費者はGMナタネを輸入しているから非GMナタネにない」と受け取られていることが分かった。今回の消費者が非GMナタネを求めていることにも驚いた。GM作物としては「除草剤耐性」と「殺虫耐性」だけであるにもかかわらず、この間の干ばつの影響から干ばつ耐性であるかのような誤解も蔓延していた。マスメディアからの取材があり、テレビや新聞などへGMナタネ栽培に向かうオーストラリアの中に一石を投じたと言える。

2月にはメルボルンでGM作物禁止のモラトリアムに関する国際交流集会が開催される予定だ。ここに日本市民団体が連帯することになる。日本からの訪豪市民のジュディ・カーマンさんの招聘と緊急講演会が大きな意味を持つてくると言える。

緊迫するオーストラリアの 非GMナタネ栽培情勢！

Who takes the Risk?
誰がこのリスクを負うのでしょうか？
Who gets the Benefit?
誰がこの恩恵を受けるのでしょうか？
Why take the Risk?
そしてなぜ私たち消費者がこれらの
リスクを引き受けなければならないのでしょうか？
www.iher.org.au

講演要旨

オーストラリアではGMナタネ栽培禁止の法の見直しが進められています。西オーストラリア州を除いた三つの州ではGMナタネ栽培に向かう可能性がります。そもそも遺伝子組み換え技術には安全性に関する検証に不備があります。例えば、動物実験ではGM作物を与えた動物に変化がなかったとしても、最終的な安全であるとは判断されません。GM作物を商品化する際、動物実験などが義務付けられています。十分に行われていない。唯一出されるデータはアミノ酸組成比だけであつたり、栄養阻害物質についての実験は行われていないのが実状です。それだけで「実質同等性」を証明しているのです。安全性を調べるには綿密な実験による裏づけが必要であるにもかかわらず、GMナタネを与えたマウスが2週間以内に死亡しなかったから安全である

とされています。サンプル数も不十分で、脂肪酸や栄養阻害物質など必要なテストは行わず、アミノ酸組成が50%以上違うものにもかかわらず実質的同等であると発表しています。一定期間、生きていたかどうかで安全性を判断することは疑問であり、このような実験は科学的な基準に達しているとは言えません。GM作物の安全性確認に関する動物実験のしかたに警鐘を鳴らしているロシアの科学者の研究によると、GM大豆

を与えられたマウスは体が未熟で死亡率は5〜6倍だったと報告されています。オーストラリアの農業は今大きな分岐点に差しかかっています。三つの州では今後GMナタネ栽培をすることが協議されており、現在大きな論争が起こっています。農民たちはGMナタネは干ばつ耐性があり、収量が上がると思われています。実は殺虫剤耐性作物と除草剤耐性作物の二つしかなく、単に耐性があるというだけで収量が上がるという

保証はありません。また広大な耕地でGM作物を隔離することは不可能です。花粉や種子が風や野生動物、洪水などによって簡単に遠くへ運ばれてしまうからです。農民にとっては非GM作物を栽培する選択権が奪われてしまうことを意味しています。しかも収穫後は分別管理されていないため、貯蔵施設で容易に混ざってしまうのです。トラック輸送中のこぼれ落ちた種子が自生する恐れもあります。農家は非GMナタネ種子の入手が難しくなる上に、GMナタネに汚染されてしまえばモンサント社に特許料を支払わなければなりません。消費者はモラトリアム政策が解除されれば非GMナタネが入手できなくなってしまうのです。オーストラリアにとって日本は強大な消費国です。日本の消費者290万人の署名は農家、企業、政府へと強力なメッセージとして届いたに違いありません。「遺伝子組み換え食品を食べたくない！」「私たちの食べる権利を奪うな！」と声をあげ非GMナタネを守っていきましょう。



オーストラリアを代表するカンガルーやエミューがGMナタネの「運び屋」になって、オーストラリア全土を汚染してしまう可能性がある

を与えられたマウスは体が未熟で死亡率は5〜6倍だったと報告されています。オーストラリアの農業は今大きな分岐点に差しかかっています。三つの州では今後GMナタネ栽培をすることが協議されており、現在大きな論争が起こっています。農民たちはGMナタネは干ばつ耐性があり、収量が上がると思われています。実は殺虫剤耐性作物と除草剤耐性作物の二つしかなく、単に耐性があるというだけで収量が上がるという

Pollutant Release and Transfer Register

暮らしの中の化学物質を考える

PRTR制度ってなあに？

溢れる化学物質

グリーンコープはせっけん派生協として「生活のすべての洗う場面にせっけんを使おう」という運動に取り組んでいます。しかし、一般的に洗濯にせっけんを利用する人の割合は全体の2%、ほとんどの人が合成洗剤を使っています。そのような中、合成洗剤の成分の中には環境に悪影響を及ぼす化学物質として問題視されているものがあります。

年々増加する化学物質を何とか減らそうと7年前に法制化されたのがPRTR制度。「PRTR制度とは何か」をまとめた上で今後のせっけん運動の方向性を探ります。

私たちの生活環境には8万種類以上の合成化学物質が溢れている。そのほとんどは50年前には存在しなかったもので、歴史的に見ても極めて短時間の間に発生したものである。しかも、その中で実態が分かっているものはわずか5%程度しかないと言われている。便利な暮らしの代償として撒き散らされた合成化学物質は人の身体や生態系にさまざまな予期せぬ影響を与えている。急増している予

ものアレルギーに化学物質が関連しているとの指摘もある中で、より安全な環境をつくりたいという要求が高まっている。しかし、そのすべてを排除することは難しい。化学物質を知った上で、どのように生活と調和させていくかが迫られていると言える。

国際的な流れに押されて

1992年、ブラジル・リオデジャネイロで開催された地球環境サミットで有害な化学物質管理の重要性が明らかにされた。以降、世界的に有害化学物質を管理しようとする取り組みがすすめられた。特に10年程前からヨーロッパで積極的な動きとなり、OECD（経済協力開発機構）が加盟国に向けて制度を整えるように勧告する動きが活発化した。このような国際的な流れの中で、日本でも1999年「化学物質管理促進法」（特定化学物質の環境への排出量の把握等及び管理の改善の促進に関する法律）以下化管法、一般的に「PRTR法」とも呼ばれる）が制定され、PRTR制度（化学物質排出移動量届出制度）が導入された。

PRTR制度とは

化管法は、人や生態系に有害な恐れのある化学物質

について適正に管理する法律で、環境を保全する上で化学物質が及ぼす悪影響を事業者が自主的に未然に防止することを目的としている。対象となる化学物質は第一種指定化学物質（354種類、特に発がん性などがある）とされる物質12種を指定し、第二種指定化学物質（81種）である。それを運用するために定められたPRTR制度では第一種指定化学物質が届出対象となっている。PRTR制度では①人の健康や生態系に有害な恐れのある化学物質を環境中へ排出した量（排出量）や廃棄物として処理するために事業所の外へ移動させた量（移動量）を事業者が自ら把握し行政に報告する②行政は事業者からの報告や統計資料等による推計による排出量を集

計し公表する③市民や行政は情報を得ることができるとなっている。これによって市民が積極的に参加できるようになった。現行のPRTR制度では化学物質の毒性管理を総量で判断するとなっていた。制定後7年を目途に見直しが行われ、2007年度がその年となっている。そこでは総量だけでなく、毒性の程度による重みを加算した毒性評価についても課題となっている。届出対象となるのは①23種の事業体②従業員21人以上③第一種指定化学物質のいずれかを一年間に1t以上取り扱う事業体、対象物質は、工業薬品、農薬、家庭用品、自動車排ガスなど354種類となっている。家庭用品の中には合成洗剤、家庭用殺虫剤などがあり、

PRTR制度の特徴

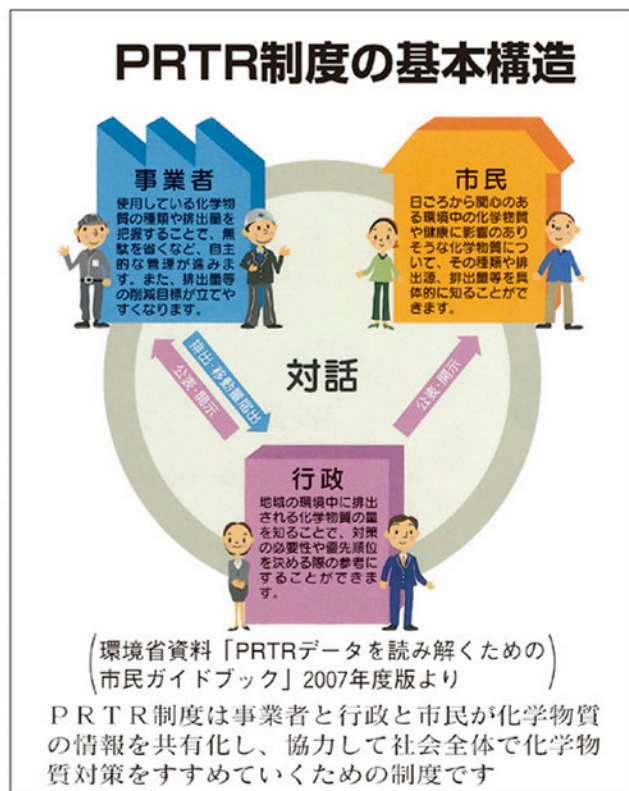
- ①人の健康だけでなく、動植物の生育にも配慮している。動植物への影響まで対象とした制度としては日本で初めて。
- ②慢性毒性など毒性が表面に現われにくく、潜在的に有害な多数の化学物質も対象としている。これまで「水俣病」など甚大な被害が出てから調査し、後追いで対策を考えるのが日本の行政であったことからするとこれも画期的な制度。
- ③大気、水域、土壌などの個別媒体だけでなく全環境媒体を対象としている。
- ④濃度ではなく排出量や移動量を把握する。
- ⑤企業が自主的に取り扱い、化学物質の量を管理し、行政に報告し、その情報を公表することになっている。
- ⑥制度の検討段階から運用まで行政、企業、国民の合意形成に努力することが求められている。国民が検討から主体として参加することは注目に値する。

LAS（直鎖アルキルベンゼンスルホン酸）、AE（ポリオキシエチレンアルキルエーテル）など、合成洗剤に含まれる合成界面活性剤があげられている。毎日の洗濯を考えることから環境運動を

合成洗剤は日本中のほとんどの家庭で毎日使われ、環境中に放出されているものだ。PRTR制度導入後の2001年から2005年

度分まで出されたデータによると、家庭から排出される有害物質（第一種指定化学物質）の半分以上がLASやAE等の合成洗剤の成分である。家庭からの排出量を推計しているのは諸外国にない日本独自のPRTR制度の特長だ。これは市民の側からの積極的な働きかけによって、より充実した制度になったと言える。事業者の責任の比重が大きくなっているが、市民の責任も問われる。せっけんは、それ自体が化学物質であるが、分解の早さから環境に与える影響は極めて小さくPRTR制度に定められた対象物質になっていない。毎日の洗濯に使用する合成洗剤を有害物質として捉えることは身の回りの化学物質について問題意識を持つきっかけにもなる。それとおして、化学物質の環境への影響を知ることもつながる。まずはPRTR制度をとくとして私たちが取り巻く環境について考え、せっけんの優位性について再確認し、2008年度シャボン玉月間に生かしていくこととする。

※約1000人からなる専門家を抱える「世界最大のシンクタンク」。経済・社会分野で多岐にわたる活動を行っている先進30カ国からなる国際機関





講師 藤田 祐幸さん

豊かな自然、食べもの、 そして生命を守るために



グリーンコープ
やまぐち生協

脱原発学習会

グリーンコープやまぐち生協では、10月14日と15日、県内2カ所で放射能汚染食品測定室室長の藤田祐幸さんを講師に、「脱原発学習会」を開催しました。

六

ヶ所再処理工場稼働阻止に向け、原子力発電所が私たちの暮らし、生命に、どう影響しているのかを知ることが目的の学習会です。それとおして強く感じたことは、「未来の子どものために負の遺産を残してはいけない」ということです。藤田さんが提示した、①チェルノブイリ原発事故が教えてくれた巨大被害②日常労働者の被曝③放射性廃棄物という3つの大きな問題に、情報操作を含め知らされていない事実がたくさんあることに愕然としました。「戦争で失った町は復興できる。しかし、原発に汚染された町には未来永劫、人は住めない」と言われた藤田さんの言葉も印象的でした。原発1基でも重大なリスクが発生するの、六ヶ所再処理工場が稼働すれば300基の原発に等しいリスクとなるなど、これはほんとうに一地方の問題ではなく、日本全体にかかわる重大な環境問題です。

今回、多くの参加者から六ヶ所再処理工場稼働阻止

グリーンコープやまぐち生協
組合員事務局 西山 ますみ

のメッセージカードや署名に協力をいただきました。また、やまぐち県内の各地域では、10月に街頭署名も行い、市民の想いを集めました。今、私たちが原発に関心を持ち、「原発を正しく知ること」「反対の意思を表すこと」がとても重要だと強く思います。

「電気」は今や私たちの生活に必要不可欠なものです。一人ひとりが日々の生活において、少しずつ節約すれば原発に頼らなくても確保できることが分かりました。そして何よりも、放射性廃棄物の問題は大きなもの、海や大気といった自然環境への被害も計り知れません。どうして「脱原発」なのかを、多くの人に知ってほしい、伝えていかなければと思いました。やまぐちの身近な問題として、上関原発建設問題があります。私たちに今できる運動方法について考えていきたいと思っています。

言・い・た・い

投稿欄



広島市

平木 恵美子 (58歳)

晩秋の野道は枯れ草が多くてどこかさみしいが、山道に鮮やかな青紫色のりんどうを見つけたとハッとすると、美しい。11月、ほとんどの草が枯れる頃に咲くりんどう。私のアルバムに一枚の写真がある。野良着姿の母がりんどうの花束を両手いっぱいにして少女のような笑みを浮かべている。母の好きな花が「りんどう」と知ったのは母88歳の時。その後3年間は帰省の度、バス停から家までの山道でりんどうを摘み、母に届けた。私の好きな花はりんどう。母の思い出と同じくらい鮮やかな色をしている花だ。

熊本県菊池市

松田 麻見 (42歳)

毎日仕事と家事、育児であつという間に月日が過ぎていきます。そんな中、16歳になった長男の誕生日。前日までしっかりと覚えていたのに当日は夕食を食べるまですっかり忘れていました。はっと思い出して「今日はお兄ちゃんの誕生日だったよ。おめでとう。」と言うと、4歳になる末っ子は「お兄ちゃん生まれてありがとう!」。みんなびっくりです。親の私が「生まれてきてくれてありがとう!」と言うのは分かるけど、いつもは兄弟げんかが絶えないのに、その時は長男も末っ子に「ありがとう」と返事していました。なんともほんわか幸せを感じたひと時でした。

電胆



イラストは平木さん作

私の好きな花

お兄ちゃん
生まれてありがとう!

思いがけない家族のひと言



No.5

被曝するということ

放射線はエネルギーの塊で、目に見えず、五感に感じないものです。発見者のキュリー夫妻を含め、その後も核・原子力開発や医療事故でたくさんの人たちが被曝して命を落としています。

被曝とは、放射線を受けた物体が放射線からエネルギーを受け取ることです。放射線が持つエネルギーは、生命体が持つエネルギーに比べ桁違いに大きいものです。人間の体温を1000分の1度しか上昇させないほどのわずかなエネルギーであるにもかかわらず、たくさん被曝すると死に至ったり、急性障害が現れたりします。また、どんなに少しの被曝でも長い年月の後にガンなどが発生することも多く、DNAを含め細胞を構成している分子がずたずたに引き裂かれ、後世にまで影響を及ぼす恐れがあります。

「原子力とは一体何なのか?」—講師・小出 裕章さん—
2007年2月22日グリーンコープ生協みやぎでの講演録より引用

グリーンコープ共同体組織委員会

言・い・た・い 読者投稿欄

- 思いがけない家族のひと言
- とっておきの一枚
- 私の好きな花

● 400字程度 ● 月切 毎月末
● 住所・氏名・年齢・TEL・所属生協名を明記して郵送またはFAX、Eメールでお送りください。掲載分には図書カード(500円分)進呈。
● 住所・氏名などの組合員の個人情報、本紙に掲載の場合のみ使用します。
〒812-8561 福岡市博多区博多駅中央街8-36 博多ビル7F
グリーンコープコミュニケーションワーカーズ 連 (REN)
「共生の時代」編集部 宛
FAX 092-481-7876
Eメールアドレス rikoho@greencoop.or.jp



茅野さんとかぼちゃの国の仲間たち



柔らかくて甘い野菜が育つ畑には堆肥をたっぷり入れた

社会福祉法人

かぼちゃの国

いま地域を考える

No.186

人が共に生きる場所をめざして

心や身体に障がいがある人や自宅に引きこもって社会参加に不安を抱いている人たちが集う居場所作りを模索し続ける「社会福祉法人かぼちゃの国」(以下、かぼちゃの国)が大分県久住町にある。かぼちゃの国が運営している小規模作業所とパン工房を訪ね、代表の茅野明さん(グリーンコープ生協おおいと組合員)らに話を聞いた。

明

るいびニールハウスの中でみずみずしい野菜が育っている。メンバーが種から苗作りをし、丹念に育てたレタスやネギなどの無農薬野菜だ。夏はたくさん虫が付いて穴だらけで、店に出せなくなった野菜もあるが、「かぼちゃの国」のメンバーは気にしない構えだ。2007年4月からは季節ごとの野菜をグリーンコープ生協おおいの店舗にも出荷している。

仲間が集まった



かぼちゃの国のはじまりは茅野さん夫妻が久住に移り住んだ1987年に遡る。愛知県などの福祉施設の経験を経て「いろいろな人が共に生きていく場所作り」を求めて全国各地を巡った後、久住にたどりついた。地域の一人として根を生やして生きていくと決意した。「たいへんだったのは周りの人たちが受け入れられることでした。10年かかりました」と茅野さんは話している。

活動が広がった



みんなで集まって何かをすれば必ずとそこに仲間が増え、活動も広がっていく。炭焼きや牛乳パックを使った小物作り、自然の中の平飼養鶏、動物たちの世話などバラエティに富んだ活動がかぼちゃの国の特長だ。これからの木を切り出し、特製の大きな炭釜が上質の炭を焼き上げる。牛乳パックをリサイクルして作る毎年恒例のカレンダーには絵の得意なメンバーが描いた干支があらわれている。「自分たちで作る喜びこそ、生活の豊かさだと手応えを感じるようになってきました」と茅野さんは力強く語る。

自分たちで作る居場所



2006年、障害者自立支援法が施行され、1割の自己負担が義務付けられた。施設利用者にとって厳しい状況になっている。「しかし、みんなの力が集まれば乗り越えられると思う。仲間と共に一つずつ取り組んでいくつもりです」と茅野さんは言う。「それぞれが求める居場所作りは決めたやすいことではないけれど、できないことはない。かぼちゃの国の豊かな村づくりはこれからも元気に続いていく。



友人・草伏村生さん(1996年逝去)の著書「冬の銀河〜エイズと闘うある血友病患者の訴え〜」をもとにした一人芝居を演じる茅野さん。いのちの大切さと「共に生きる」ことの意味を訴えながら公演活動が続いている

や卵を使ったパン工房「久住高原ばんころりん」をオープンした。ゆつくりとくつろげる喫茶コーナーもあり、地域の人の賑わう。環境保全を考え、2006年にはBDF(バイオデザイゼルフューエル)精製作業所「地球人」を稼働。家庭や給食センターなどから回収した廃食油を精製してバイオゼルの燃料にする事業にも取り組んでいる。かぼちゃの国や地域の事業などでも利用され、軽油並みの走行性で馬力もあると評判になっている。廃食油の回収はグリーンコープ生協おおいの組合員にも呼びかけ、多くの組合員から協力してもらっている。

リユース リサイクル データ

2007年10月分

放射能汚染測定結果報告(172)

2007年10月

放射能汚染食品測定室検査。NDは、検出限界値(1ベクレル/kg)以下です。
※は、グリーンコープ連合取り扱い商品です。

検体名	産地	セシウム134	セシウム137	合計ベクレル/kg
※ スライスチーズ	ニュージーランド	ND	ND	ND
※ スパゲッティ	カナダ	ND	ND	ND
※ オリーブ油	ギリシャ	ND	ND	ND
※ ホワイトペッパー	インドネシア	ND	ND	ND
※ ぼら(魚)	福岡県	ND	ND	ND
※ あさり	福岡県	ND	ND	ND
※ みかん	熊本県	ND	ND	ND
※ みかん	福岡県	ND	ND	ND

放射能汚染食品測定室の都合により、9月分は一部遅れています。

回収本数
1,199,988本
回収率
98.1%
(9月16日〜10月20日4回収分)
牛乳びん

回収本数
172,774本
回収率
50.0%
リユースびん
※現在供給本数のカウント方法を見直しています。

回収重量
13,050kg
回収率
58.5%
トレー

回収重量
37,810kg
回収率
109.8%
モールドバック

2007年11月の組合員数 362945人

(11/20現在)

グリーンコープ生協ふくおか
グリーンコープ生協さが
グリーンコープ生協(長崎)
グリーンコープ生協くまもと
グリーンコープかごしま生協



グリーンコープ生協おおい
グリーンコープ生協みやざき

グリーンコープ生協おおさか
グリーンコープ生協ひょうご
グリーンコープ生協おかもやま
グリーンコープ生協とっとり
グリーンコープ生協(島根)
グリーンコープ生協ひろしま
グリーンコープ生協みやまぐち生協